

《月々の手入れ》

【7月】

7月は、早々に梅雨が明けて連日真夏日の盛夏になることもありますが、例年なら梅雨最盛期から梅雨末期、いつまでも梅雨が明けない年もあります。いずれにしても日本の夏の高温多湿は病害虫も蔓延し、ばらにとっては苦手な季節です。この夏場にばらの葉が病害虫に落とされず、秋を迎えることができれば、すばらしいばらが咲くことでしょう。

今月の主な手入れ

1. シュートの処理
2. 株の整枝
3. 切り戻し剪定方法
4. 病害虫の対応
5. 根頭癌腫病の対処方法
6. 施肥
7. 灌水

1. シュートの処理

(1) シュートについて

ばらの栽培上、「シュート」という言葉が必ず出てきます。シュートの処理は、ばらにとって最も大切なので、その発生と成長してからの処置の仕方は、しっかりとマスターしましょう。

冬元肥が多肥料気味で元気の良い株、若い株は花の咲いている5月下旬あたりから発生してきます。

通常は1番花が終わって追肥を入れた6月中旬から8月中旬まで、株元または株元に近い枝の下部から、普通の新枝より太く、赤味を帯びた元気の良い芽を発生します。これが株元ならベイサルシュート、その付近からならサイドシュート(途中シュート)となり、将来この秋から来春に最も良い花を咲かせる主幹となります。適切な処理をし、大事に大切に育てましょう。

(2) シュート発生のメカニズム

シュートの発生は株が若い新苗か2年大苗に多く発生しやすく、当然植えた土壤に適度な肥効があれば、成長期のばらからは自然に発生してきます。一度に数本も発生してくることがありますが、全部育て

でも細いシュート枝になるだけで、2,3本残し、後はかき取った方が太くなります。

しかし株が5年以上経過して古くなると、品種にもよりますが、いくら肥料を投入しても株元から全く発生しないばらが多々あります。

また3年以下の若い株でシュートが発生せず、成長の思わしくない株は、樹が根頭癌腫病に侵されているか、または植えた土壌が著しく不毛な土壌であるかです。そのほかのシュート発生促進方法は先月の通りです。



図 1

(3) シュートのピンチ

株元からシュートが発生し、長さが15 cm~20 cmぐらいになると本葉(5枚葉)が5,6枚発生してきます。この時に一番先端の膨らみを感じるところから下を指先で折るように切除します。HTの高性種では本葉の数を意識せずとも、10 cmぐらいから行うこともあります。これをシュートのピンチ(指で折るのでソフトピンチ)と言います。

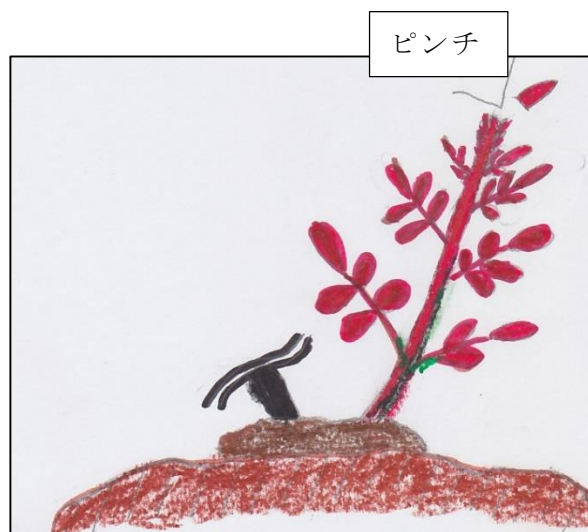


図 2

ハサミは使わないのが鉄則です。ハサミを使うとまだ柔らかい枝に雑菌が移って、切り口から枯れこむことが多いからです。

(4) HTのシュート処理

最初のピンチから1,2週間で本葉の付根から次の芽が伸び始め、3週間ほどで成長しますが、本葉の1番目だけでなく2,3番目からも同様に伸びてきます。ここで、HTとFLなど房咲き種では処理の仕方

が異なります。

HT種の場合は伸びてきた芽のうち、必ず5枚葉から出ている一番成長の良いものだけを残し、後の芽はすべてかきとってしまいます。枝を分岐させず1本になるように仕立てます。これがHTの1本仕立(デイシューティング)という処置方法です。

この方法は次の3段目も、4段目もデイシューティングで貫き、秋の剪定まで一本仕立で育てます。最も早い5月下旬に出たシュートを処置すると、9月上旬の秋剪定までには約3か月90数日、1段に平均3週間21日要するとすると4段以上伸びることになります。これでは秋剪定にカットし過ぎとなり、ショックを与えることとなります。

しかし、この処理を繰り返すと、芽の出る脇芽が多く使われて、本剪定の場所がなくなることがあるので、先端に蕾から花をさかせるまで時間を稼ぐか、20日前の切り戻し剪定を行う。

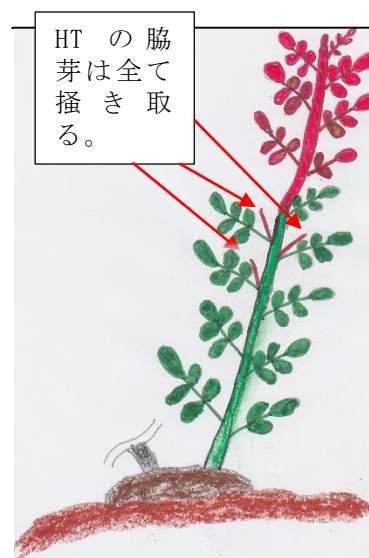


図3

7月10日ごろ発生したシュートが、秋剪定時には、3段目でピンチ剪定できることになり、良花を咲かせることができ、理想的です。

(5)フロリバンダなど房咲き種のシュート処理

房咲き種の場合も最初のシュートを放置すると、先端付近は脇芽や副蕾が多く出てほうき状になり、低性品種では本葉がないままの主幹となり、秋剪定の位置がないこともあるので、最初のシュートは咲かせずに、本葉が5、6枚見えたらピンチする。これにより秋剪定において本葉で剪定する場所が多くなり剪定がし易くなります。2段目以降はHTのように1本主義(デイシューティング)で処理しようとしても、脇芽の発生が多く手に負えなくなるので、咲かせても良いでしょう。

(6)つるばらのシュート処理

つるばらのシュートはピンチなど一切せずにそのまま育てます。品種によってはその先端に花を咲かせます。そのまま大事に育て、花が終わったら花柄を摘み、冬まで誘引せずにひもなどで縛り、冬の誘引剪定はシュート枝を新しくこれまでの枝を切除し新旧枝の更新を図ります。

2. 株の整枝

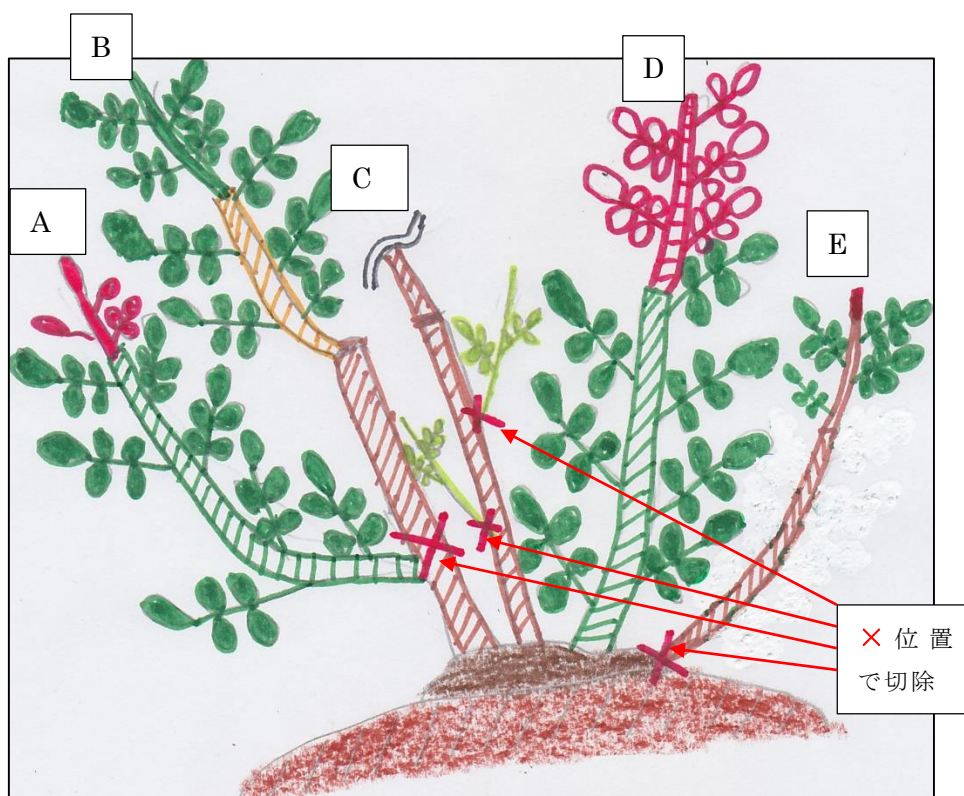
この季節ばらは、春の1番花を咲き終えて、次の6月下旬から7月に

2 番花を咲かせます。同時にどんどん枝を伸ばして成長期に入っています。そのまま秋ばら剪定まで放置すると、ばらの樹は密集して、風通しが悪くなり内側の弱小枝から各種病害虫が発生し易くなります。

新しいシュートが出て、2 段目ぐらいまで伸びてから、それまでの主幹枝の弱い枝は、根元から切除します。

特に 2、3 年目の株は成長と共に太くて充実したシュートが出易いので、その都度古い細い幹枝を根元から切除して枝の世代交代を促します。

同時にブラインド枝(蕾のつかない弱小の枝)や、春花を咲かせた枝は秋まで残さないことを念頭に、また同じ主幹枝から伸びた新しい枝に栄養が行き渡るようにその元から上の 1 番花を咲かせた枝を含めて切除する。



- A. 春の花を咲かせた主幹枝 B の下方から出たサイドシュート
- B. 春花の主幹枝、A が 2 段目まで成長したら、切除。
- C. 春花の主幹枝、新芽でも中に伸びた弱小枝は切除
- D. 今年出たベーサルシュート、大事に育て 2 段目がピンチでできるようになったら E は切除
- E. 古く細い主幹枝、この春まで開花に使った主幹枝でしたが花が小さかったり、2 番花の枝も細く弱小な枝は株元から切除

3. 切り戻し剪定方法

切り戻し剪定とは、秋の本剪定までに仮剪定を行い、その次に伸びた芽の枝をピンチにより剪定を行う方法です。

例えば、病害虫で葉をほとんど落としてしまったばらを秋剪定までに蘇らす方法で、品種にもよりますが、大変効果的な方法です。

また、秋の剪定時に4段目まで達したシュート枝を、一気に2段目、3段目まで剪定してしまうと、ばらはショックを受け、新芽の出が遅くなり、せっかくの良枝でも良花が得られないこととなります。

これを防ぐ方法として、一端切り戻し、その後伸びてきた枝をピンチにより剪定する方法で、しかもハサミを使わないため、ばらにショックを与えない剪定となり、良花を咲かせることが期待できます。

切り戻す時期は、次の芽が伸びてピンチできるまでの日数は約20日とすると、例えば、秋本剪定が9月5日で、切り戻し剪定ピンチを1回で行う場合、逆算すると8月15日が切り戻し日となります。

さらに高度な、ピンチ2回で行う場合、その20日前ですから7月26日、さらに3回では7月6日が切り戻し日となります。

秋剪定は品種ごとに剪定日が違い、同じ株でもシュート枝と普通の主幹枝では芽の動きが異なるため、一律に計算できないのが難点です。

最も良花が期待できるシュート枝だけを、1回ピンチで切り戻しする方法から試してみましよう。

4. 病害虫の対応

(1) うどん粉病

うどん粉病の分生子(胞子の一種)の発芽最適温度は21℃、10～26℃の範囲で発芽可能ですが、30℃以上では発芽しません。湿度は97～99%が最適条件です。

しかし、水には弱く、特に分生子着床直後に、葉面が水で濡れていると発芽困難になります。従って葉水をかけることは有意義ですが、黒星病との関係で長時間濡れているのはよくありません。このため夕方葉水は感心しません。朝のほうが良いでしょう。

また、新しい胞子が飛散するには27℃、湿度40～70%の条件が必要となります。

絶好の生育条件は、日中は温暖で曇り、夜間は冷え込み多湿の気候となります。

盛夏は一端、成りを潜めますが、決して治ったわけではありません。早期発見、予防対策が最良で、発生初期の消毒以外ありません。

運悪く蔓延したならば、治療薬で対処します。治療薬ではサプロール、トリフミン、パンチョ、サンヨールでも治まらない場合は、ガッテン乳剤を試してみてください。まだ新しい薬剤なので確かなことは言えませんが、もしかしたら、うどん粉病の特効薬かもしれません。どの薬剤も使用倍率、回数をよく守り消毒しないと、耐性が付き薬剤

が効かなくなります。含有系統の違う薬剤を何種類か使い、ローテーションして使用することをお勧めします。

(2) 黒星病

黒星病の胞子は、22～26℃で、湿った葉面上で9～18時間で発芽します。黒星病菌の胞子が発芽するためには、湿度100%で濡れている時間が5分以上必要なこと。葉に感染するには、さらに7時間以上の濡れ時間が必要となります。

感染してから症状が現れるまでには葉の表側で6～7日目、裏側で3～16日目であり、殺菌剤の消毒では感受性が最初の90時間しかないと言われていまして、症状が視認できるようになってから薬剤散布しても、手遅れということになります。

以上から、日ごろから予防消毒する必要がありますが、特に雨前・後の消毒が有効ですが、雨前のほうが更に有効です。

(3) スリップス対策

スリップス(アザミウマ)は、ばらの花に付く細長い小さな虫で、開花した花弁が汚れて薄茶ぽく変色し、無残で鑑賞用には不向きです。花弁の内側に細かく動く細長い黒い小さな本虫を肉眼でも見ることができます。ばらに付くアザミウマは黒っぽいのでヒラズハナアザミウマと思われます。

当初は一般的なオルトランやスピノエース、スミチオンなどで十分でしたが、使用回数が多くなって耐性が付いたため全滅が難しくなっているため、薬剤を変える必要があります。

カスケードやネオニコチノイド系のモスピラン、それに今のところオオタバコガの特効薬、アフーム、ベストガードが最も効くようです。いずれにしても表示の使用回数を守って正しく散布します。ちなみにアフームは年2回までです。

(4) ハダニ対策

ハダニは一端持ち込まれると、短期間で回りのばらに寄生し葉を落とす最も厄介な害虫です。寄生すると葉の緑は薄れて、全体が元気のない葉となり、やがて黄変して落葉します。もちろんばらの成長もストップしてしまいます。葉裏を見ても肉眼では見えないため、ルーペを使用して確認できます。ばらのナミハダニに適用のある薬剤を使用して退治します。

また、水には弱いため、毎日葉裏に水圧の強いシャワー水をかけて水で飛び散らす予防法が結構効果があります。

予防対策でダニ剤を規定回数以上使用すると、年々その薬剤では効かなくなるので次々と薬剤を購入することになります。ニッソラン、

コロマイト、バロック、カネマイト等、これらで効果が見られなくなった場合にはダニ太郎(マイトコーネ)またはダニサラバを用います。ハダニの卵・幼虫・成虫と各ステージにすべて効果があり即効性で退治できます。但し年1回ないし2回使用規定なので、用法はしっかり守りましょう。

(5) コガネムシ対策

コガネムシも盛夏に発生し、成虫はばらの花・葉を食害する害虫です。主にマメコガネ、コフキコガネ、カナブン等ですが、地植え、鉢植えとも腐葉土、堆肥を多く使用した用土に産卵し、幼虫は土中でばらの根から養分を吸い取るので、ばらの成長に悪影響を与えます。春前にばらの用土表面からスミチオン・デブテレックス・カルホスなど殺虫剤を灌注すると幼虫が表面に出てきて退治することができます。

主に7月～8月の盛夏にばらの葉よりも花を食害しますが、秋風が吹き始める秋剪定以後はいなくなるので、あまり気にする害虫ではありません。

5. 根頭癌腫病の対応

ばらの台木として使われているノイバラの根の比較的地上部に近いところに、もくもくとしたこぶ状の塊が発生します。この病原菌は日本中の地中に普通に存在する菌の一種で、日本に自生するノイバラの根に寄生し、根から栄養分を吸収し成長します。罹病したばらは養分を吸われて、健康なばらと比べて成長が悪く、大きく育ちません。

ノイバラを台木として使用していますから、寄生のリスクは避けられませんが、近年は癌腫に強いノイバラを系統選抜して台木に使用しています。

ばらの根を傷つけると、傷口から侵入し易くなります。従って地植えのばらの植替え苗や、地掘りの2年大苗などは根を切っていますので侵入され易くなります。鉢植えでも植替え時に根を切ったりするので、よく消毒したハサミを使用する。

土中によく存在しますが、特に腐葉土を多用する大菊を栽培した土壤にばらを植えると多発します。

癌腫を取り除くため使用したナイフや鎌など、また発生した土中に使用したスコップなどは、道具からの感染を防ぐため一度熱湯消毒してから使用します。

対処方法

対処方法は、癌腫が発生した株は、冬に抜いて土壤をすべて入れ替えた方が一番得策です。使用したスコップは熱湯消毒します。そのまま新しい土を触ったのでは意味がありません。

どうしても抜きたくないばらの場合、発見した癌腫は、見える範囲で

ナイフか鎌等で取り除き、傷口にダコニール原液を塗ります。周りの土を適度に取り除き、そこへ、乳酸菌発酵資材(乳酸魁、ボカシコンブペレット)を約 500 cc以上投入します。その後 2 ヶ月に一度ぐらい乳酸菌発酵資材を投入します。これで強いばらは甦ることもありますが、再び癌腫になり治らないばらは、廃棄してください。

土中の乳酸菌は根頭癌腫菌を抑制する働きがあるのではないかと考えています。従って、ばらを植える用土には腐葉土や堆肥類は使用せず、分解の早い完熟馬糞堆肥を使用しています。牛糞堆肥は分解が遅くいつまでも窒素分が残留します。

6. 施肥

(1) 地植え

地植えHTの場合 6月に、春の一番花が終わった後に夏元肥として 3大要素の含まれた有機肥料を施してあり、シュートが出てきた場合はこれ以上施肥する必要はありません。特に3年以上で十分に大きく育ったコンテスト用HTでは、これ以上の施肥は控え、さらに秋剪定前に花を咲かせて余計な肥料栄養を消費させてしまう。

地植えFLの場合、普通に2番花、3番花と楽しんでいけば、肥料分を消費しているので、シュートが出ていても今月は普通に3大要素を含んだ有機肥料にバッドグアノ等のリン酸肥料を1:3の割合で混合し追肥として施す。

(2) 鉢植え

鉢植えの場合は、HTやFL等品種の区分をせず、2番花やシュートの出とは関係なく今月も追肥します。リン酸のバッドグアノを1:3の割合で混合した肥料を置肥します。

育成中の新苗の場合は窒素分を多めに施肥し、今月の成長期を大いに活用し大きく育てます。そのため、置き肥だけでなく、液体肥料、葉面散布なども用いて、強肥料でどんどん大きく育成します。

7. 灌水

梅雨の時期以外、盛夏になると鉢植え、地植えとも水を十分与えます。投入した肥料の効果も出すため、多めの水遣りをします。

地植えの植えてから2年目ぐらいから、表面が乾いたらたっぷり100以上、1年以上の若い苗は水切れを起こすと夏場に枯れるので、頻度多めにして水やりします。

鉢植えの場合も表面が乾いたら底から出るくらいたっぷりを与えます。夏場でも2日に一度の保水性のある用土なら、理想的です。

地植え、鉢植えとも、夏場のマルチングは保水性、雑草防止に有効です。但し鉢植えの追肥時には、素材によって、一長一短です。